（岩倉紙芝居館古典館<http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm>）　宰主　上田啓之

『荀子』議兵篇に、臨武君の言として「孫（子）・呉（子）も之（勢利、変詐、感忽、悠闇）を用いて、天下に敵無し」とあり、『韓非子』五蠧篇には、「孫・呉の書を蔵する者は、家ごとに之れ有り」、さりとて兵は弱いと嘆いており、戦国時代に広く普及していたとされる。司馬遷は「孫子・呉起列伝」を著し、呉王の闔閭（こうりょ、在位BC514-496）に仕えた斉人の孫武、その百年後の子孫、斉の田忌に仕えた孫臏の事績（桂陵の戦BC353、馬陵の戦BC341）、孔子の高弟の曾子の弟子であり、後に魏の文候（在位BC445-396）、武候（在位BC395-370）に仕えた衛人の呉岐の事績を記した。『漢書』芸文志・兵権謀家類には、『呉孫子兵法』82巻・図9巻、『漢書』30巻・志第10に「斉の孫子89編、図4巻」とあり、 顔師古がこれに「孫殯」と注 している。現テキストは13編であり、魏の曹操（武王）が編纂注した『魏武注孫子』による。
1972年、山東省銀雀山の前漢時代の墳墓から『竹簡孫子』や『孫殯兵法』の竹簡が出土し、『呉孫子兵法82巻・図9巻』と『斉の孫子（孫殯）89編、図4巻』は別物で、孫殯の兵法書は伝わっておらず、『呉孫子兵法』が継承されていることが判明したそうである。孫武の記したものが、後継者により82巻・図9巻に膨れあがり、曹操が基本となる部分に簡略化したとされる。続日本記、天平宝字四年（760年）十一月丙申条に、「舍人の春日部三関に刀を授け、中衛舍人土師宿禰関成等六人を大宰府に遣はし、大弐吉備朝臣真備に就かせ、諸葛亮八陳と孫子九地及び結営向背を習はしむ」とあり、「孫子」はこの時代から我が国でも読まれていた。

、、、、、、　　孫子曰く、およそ軍を処（お）き敵を相（み）るに、山を越（こ）ゆれば谷に依（よ）り、生を視（み）て高きに処（お）り、隆（たか）きに戦うに登ることなかれ。これ山に処（お）るの軍なり。
■處は虍と処からなり、処は説文に、「止なり。几を得て止む。几に従い夂に従う。處、処は或は虍聲に従う」とある。虎皮を纏った者が几に腰を掛ける形、神事、軍戯からくるとされる。処軍は軍を宿営させること。■相は木と目からなり、易に「地可觀者，莫可觀於木（生えている木を観ればその地がどんな地であるかが分かる）」とあり、物事の本質を観ること。相敵は敵の実情を観察すること。■絶は説文解字注に、「絲を(絶) 斷つなり。之を斷つ則ち二を爲す、是絕と曰く。之を引申して、凡そ横越、之れを絕と曰う。絕河の如き是を渡とすなり。又絕は則ち窮。故に引申して極と爲る。絕美、絕妙と言うが如き是なり」とあり、意味が広い。■谷は、「泉出でて川に通ず」ところであるが、山気の深遠なる所で、老子に、「谷神死せず」、「天下の谷となる」、「上徳は谷の若（ごと）し」などともあり、すべてが集まり、生気のある所でもある。■絶山依谷は、山を越えるには谷に依るとも、山を越えて谷に近い所に宿営するともされる、水と牧草の便を想定している。■視生については曹操が「生は陽なり」と注したことで、太陽に面す、太陽を視る高所、遮るものがなく見下ろすような高所に居れというイメージで諸家が釈している。視の旧字は視であり、詩、小雅、鹿鳴（ろくめい）の箋に「視は古の示なり」とあり、「示と見」からなるが、この「見」はjiàn（みる）ではなくxiàn（あらわれる）であり、示し現れること、降臨の義からくる。視生處高は、生となって現れ示すものは高に處る、戦いにおいて、生き残るは高きに居る者のこと。■隆（隆）は説文に「豐大なり。生に従い降聲」とある。このため、戦隆の意味が通らず、隆を降とし、降下する（敵）と戦うとする説となる。或いは隆を「高なり」とし高と戦うとする説ともなる。隆の金文では、阝（神梯）を神霊が降下するのを土主が迎える様、それが豐大であることが原義という（字統）。ここでは、多勢で勢いよく降下する敵を迎えて戦うことを想定していよう。無登とは、敵が降下して平地に降りるのを待って迎撃すること。■以上は山における軍の心得、対処である。

、、、、、、、、、　　水を絶（わた）れば必ず水に遠ざかり、客、水を絶（わた）りて来たらば、これを水の内に迎うるなく、半（なか）ば済（わた）らしめてこれを撃つは利（り）あり。戦わんと欲する者は、水に附（つ）きて客を迎うることなかれ。生を視（み）て高きに処（お）り、水流を迎うることなかれ。これ水上に処（お）るの軍なり。
■水shuǐ 河流 漢水、淮水の類。絶水は渡河。主は戦いのホスト、客は戦いのゲスト。ホストが渡河すれば河から離れて宿営する。ゲストが渡河して攻撃してくる場合。水内に迎えるとは、渡河する敵を河岸に上げなくしようとする戦い。これはゲストに渡河を断念させようとする戦法。■附fù は近、戦うなら水辺で客を迎撃するな。戦って勝つ自信があるならば、半ば渡河させてから攻撃すべし。渡河したゲストの隊形が整う前、首と尾の連携が整う前に攻撃して混乱に陥れることが肝要という。■視生處高は上流下流の上流を高とする。無迎は下流で上流のホストを迎えてはならない。水流の勢いを恐れるべし。下流に係留する危険をも云う。また、下流では毒を投ぜられるを慮るべし。

、、、、、、　　斥沢（せきたく）を絶（こゆ）れば、ただ亟（すみや）かに去って留まることなかれ。もし軍を斥沢（せきたく）の中に交（まじ）うれば、必ず水草に依よりて衆樹（しゅうじゅ）を背せにせよ。これ斥沢（せきたく）に処（お）るの軍なり。
■斥chì は多義。初文を㡿（しりぞける、うかがう）とし、逐、遠、度、視、望とする。「書、禹貢」海濱廣斥の「釈文」では「斥は地鹹（塩分が多い）を謂う」とする。荘子、逍遙遊篇の釈文には、斥を小澤とする。漢代には、廣、開の義に用いられる。斥を鹹鹵（かんろ）とすれば、斥澤は飲み水、飼料に適さず、不毛の湿地、沼地となる。斥を遠、広、開とみて、守り難い低湿の地とも釈す。■亟jí は、説文に、「敏疾なり。人に従い口に従い又に従い二に従う。二は天地なり」をうけて、徐鍇（じょかい921 - 975年；説文の注釈者）曰く、「天の時に乘り、地の利に因り、口で之を謀り、手で之を執り、時を失う可からず。疾なり」と。■斥澤では通り過ぎるのがよいが、もし敵と遭遇するならば、飲料水と草のある場を確保し、薪のある林を背にすべし。水樹有るところは水底が落ち込むことがなく、地の利があると釈すむきもある。

、、、、、、　　平陸（へいりく）には易（やす）きに処（お）りて高きを右背（ゆうはい）にし、死を前にして生を後（うしろ）にせよ。これ平陸（へいりく）に処（お）るの軍なり。およそこの四軍の利は、黄帝の四帝（してい）に勝ちしゆえんなり。
■處易は、坦易、つまり坦率平易、前が開けており、凸凹のない所に居ること。孫子の時代は車戦が主であり、戦車が自在に動ける地を想定する。曹操以降の註では、騎馬戦が想定されている。■平地における高低については、右を高、左を低とする。丘を背にすを高、丘に向かうを低、後を高、前を低とし、また、高を生、低を死としていよう。■四軍之利とは、山、水、斥澤、平陸での軍の利。■四帝の四とは東西南北、黄帝は中央（黄；土）の帝、東は青（緑；木）帝、西は白（金）帝、南は紅（赤；火）帝、北は玄（黒；水）帝であり、中央の帝が四方の帝に勝つとした。黄帝は軒轅（けんえん）、軒は説文に、「曲輈藩車（きょくちうはんしゃ）」とあり、注に、曲輈とは藩蔽之車（三方が覆われた車）、小車を輈と謂い、大車を轅と謂う。人が乗る所に其れ安を欲す」とある。轅（ながえ）が上に曲がり、車箱の両側に覆いが付けられている立派な車、安車ともされる。軒轅は指南車を考案し、霧の中でも方向を失わず勝利したとされる。史記、五帝本紀によれば、少典の子で姓は公孫。神農氏の世が衰え、蚩尤（しゆう）が暴をなし、炎帝（えんてい）が諸侯を侵犯した。軒轅は「徳を修め、兵を振（ととの）え、五気を治め、五種を蓺（う）え、万民を撫（な）で、四方を度（はか）り、熊（ゆう）・羆（ひ）・貔（ひ）・貅（きゅう）・貙（ちゅ）・虎（こ）に教え、もって炎帝と阪泉（はんせん）の野（や）に戦う」、三戦して勝ち、諸侯から師を募り、蚩尤と涿鹿（たくろく）の野に戦い殺したという。これらの戦いでは、自然神、人、半人半獣、禽獣、魑魅魍魎が入り乱れ、天も地も大混乱に陥り、堯帝の時に、天地の交通を断ち、天の秩序を回復させたという。軒轅は、軍事的天才とされ、常処なく、天下を平定するために四方に遠征し、「天地の紀（き）、幽明（ゆうめい）の占（せん）、死生の説、存亡の難に順（したが）う。時に百穀草木を播（し）き、鳥獣蟲蛾（ちゅうが）を淳化（じゅんか）し、日月・星辰・水波・土石・金玉を旁羅（ほうら）し、心力耳目を労勤（ろうきん）し、水火材物を節用す。土徳の瑞あり」、故に、黄帝と称されたという。

、、、、、、、、、、、、　およそ軍は高きを好みて下（ひく）きを悪（にく）み、陽（よう）を貴たっとびて陰を賎（いや）しむ。生を養いて実に処（お）り、軍に百疾（ひゃくしつ）なし。これを必勝（ひっしょう）と謂う。丘陵隄防（ていぼう）には必ずその陽（よう）に処（お）りてこれを右背（ゆうはい）にす。これ兵の利、地の助けなり。上（うえ）に雨ふりて水沫（すいまつ）至らば、渉（わた）らんと欲する者は、その定まるを待（ま）て。
■惡wù は憎、èは不善　■軍の宿営における陰陽。陽とは養生であり処実とする。曹操は水、草の便で人馬を養うこと、高地に居ることとした。軍における疾病を重視することによる。テキストによっては、軍無百疾の前に是謂必勝を置くものがあり、その場合にはニュアンスに差が出る。孫子は陰陽に関連させて、記述をしており、陰は極まれば陽に転じるものであり、生が死、実が虚と転じる変位を想定していよう。■丘陵については先にみた。隄防は堤防とみなされるが、陽におり水を右背にして其の陽に居るとは、如何なる位置となるのか？河川、沼湖等の堤防であれば、河川の幅や流路、沼湖の形状が万別であり、理解に苦しむ。右背から攻撃を受けない位置であり、相手に対して上流側に居ることになろうか。隄防は聖地を防御する土堤が古義である。隄は説文に、「唐なり、𠂤（阝）に従い是聲」とあり、爾雅、釈宮に、「廟中の路、これを唐といふ」とあり、逸周書、作雒解に「隄唐（中庭の道）」とある。また、唐は場（儀礼の場）ともされる。　■上雨は上流での降雨。■沫は、元来は蜀の沫水で長江にそそぎ込む川のこと。水沫至は、川が泡立ち流れ来ること。その上流から大量の水が流入する兆候であり、渡河は危険である。杜佑は濁沫の場合には渡河を断念させるための敵の工作を疑えとする。

、、、、、、、、、、、、、、、、、　　およそ地に絶澗（ぜっかん）、天井（てんせい）、天牢（てんろう）、天羅（てんら）、天陥（てんかん）、天隙（てんげき）あらば、必ず亟（すみや）かにこれを去りて近（ちか）づくことなかれ。われはこれに遠ざかり、敵はこれに近（ちか）づかせ、われはこれを迎（むか）え、敵はこれに背（うしろ）にせしめよ。軍行に険阻（けんそ）、溝井（こうせい）、葭葦（かい）、山林、翳薈（えいわい）あらば、必ず謹（つつ）しんでこれを覆索（ふくさく）せよ。これ伏姦（ふくかん）の処（お）る所ところなり。
■絶澗、天井、天牢、天羅、天陥、天隙については、異同があり下の十一家註を参照いただきたい。■澗　説文に、「山夾の水なり」とあり山間を流れる川、絶はそれを強調する語であり、深く険しい渓谷に流れる川のこと。■天　説文に、「顚なり。至高にして上無し」とあり、顚とは頂、であり「てっぺん」のこと。絶と同じく、強調する語となっている。■井は多義であり、水を汲む井、首や足の枷、人や獣を陥れる陥阱（かんせい）、死者を収める棺、器物を作る範型などがある。はまり込んで出られない地。■牢は説文に、「閑、牛馬を養ふ圈なり。･･･其の四周帀（めぐる）に取るなり」とあり、中が広く入り口の狭い養牛場のこと。入るに易く出るに難きこと。■羅は説文に、「絲を以て鳥を罟（あみ）すなり」とある。藪や葦原のごとく、身動きがとれない地。■陥は説文に、「高下なり。一に曰く陊（お）つるなり」とあり、臽は人が坎（くぼみ）に落ち込んでいる形、足をとられたり、落ち込んだりする地。■隙は、説文に、「壁際の孔なり」とあり、壁の穴から光が刺してくる様を想定している。閒ともされ、岩壁に挟まれた閒道のような地。■敵がこれらの死地を背にするように追い込むことが肝要とする。■険阻、溝井、葭葦、山林、翳薈が軍行の観点で記されており、十一家註では下の曹操の解釈が基本となっているので参照いただきたい。ここでは字義をみておきたい。■説文では、「険は阻であり阻は険であり難」なこと。■潢は、説文では、「積水池なり」とあり、水溜まり。潢井は車輪や足がとられる「ぬかるみ」。■葭は初生の葦のこと。■翳は、羽で作ったうちわ形のもので、舞踊で顔を隠す所作に用いることで、貴人の顔を隠すに用いられ、かざす、かくす義にも用いられる。薈は草木が盛んに茂ること。■覆索の覆は繰り返して調べること、索は捜すこと。■伏は伏兵のこと、姦は神を汚すことが原意で、この場合では、隠れ盗み見て、相手の意図を探る間者のこと。■この五処では、伏あるいは姦の危険に留意すべきである。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、　　敵近くして静かなるはその険（けん）を恃（たの）めばなり。遠くして戦いを挑（いど）むは、人の進むを欲するなり。その居（お）る所の易（い）なるは、利なればなり。衆樹（しゅうじゅ）の動くは、来たるなり。衆草（しゅうそう）の障（しょう）多きは、疑（ぎ）なり。鳥の起（た）つは、伏（ふく）なり。獣（じゅう）の駭（おどろ）くは、覆（ふく）なり。塵（ちり）高くして鋭（する）どきは、車の来たるなり。卑（ひく）くして広きは、徒（と）の来たるなり。散（さん）じて条達（じょうたつ）するは、樵採（しょうさい）するなり。少なくして往来するは、軍を営（いと）なむなり。
■静は、古くは、「東或（こく、國）を静（やす）んず（[班𣪘](http://jytq.chnart.com/index.php?m=content&c=index&a=show&catid=12&id=1067)）」とあるごとく、寧静が本義であり、安堵感があり、しかも、物音をたてない緊張感もある。■恃は、説文に「賴なり」とある。賴は字形に貝（財貨）を含み、財貨利福のよることが原義。恃は寺（手に持つこと）と忄（心）とからなり、心中に自らを保持すること。ここでは、その険阻により、パニックに陥らず、平常心を保つこと。■挑は、扌（手）と兆（灼いた亀甲の亀裂）からなるが、兆を手にする行為の意味が種々に解釈され、説文に「撓（たわむ）なり」とある。注には、「擾なり。擾は煩なり。挑は之を撥動すを謂う」とあり、ここでは、敵を煩わせ、挑発すること。■人は他人、相手のこと。■所居易は、敵が攻めやすい所に居ることは、当然危険である。それでもそうすることに利があるとは、おびき寄せて叩くことができる準備が出来ていることになる。それが分かっていながら敵に有利と思わせるのは容易であるまい。逆に、敵に攻めることを躊躇させる策となることがある。■衆樹の動、日本人は樹木が揺れ動くことを想像しがちであるが、注釈家達は軍が樹木を切り倒して行軍の道を作っているとみている。万単位の兵、馬、車の森林での軍行を想定していよう。■障は、説文に、「隔（へだ）つなり」とあり、障壁をつくること。曹操が草を結ぶとしたことに諸家が従っている。通行を障害する義と積み上げた草に伏兵を隠していると疑念せしめ、退避する時をかせぐとしている。■起は、説文に、「能（よ）く立つなり」とあり、座している者が立って歩きだすこと。地面や水面の鳥が飛びたつこと。■駭は、説文に、「驚くなり、馬に従い亥声」とあるが「亥」の解釈が当時混乱していたようで、元来は豕殺（たくさつ）した犠牲の形という。敬は攴（殴打する）と茍（𠙵の前に跪く人；犠牲者）からなり、犠牲の儀式に関する動作であったとみられるようである。おどろくことに驚・駭と馬が用いられるのは、馬の敏感な性格によるとされる。■伏は人や犬を埋めて邪霊を防ぐことが原義であり、始皇帝の兵馬俑を想起させる。覆は説文に、「覂（くつが）へるなり。一に蓋（ふたをする）と曰ふ。襾に従い復声」とある。襾は「おおう」ことであり、乏の原義は屍であり、屍体をおおうことが初義であるが、復に死者の霊を呼び戻す義があり、「くつがえる」ことでもある。ものを何度も「くりかえす」こと、「しらべる」ことにも用いられる。伏兵は予期しない所で待ち伏せをする兵。覆には、死体が起き上がる、何も居いはずの所から突如現れる、味方のはずがひっくりかえるような驚きがある。■銳は、説文に、「芒（のぎ）なり。金に従い兌声」とし、籒文（ちゅうぶん；篆書の一種）として、㓹をあげ、銳であり厂剡に従う」としている。許慎は、㓹を厂剡とし、𦺶（艸の小なる者、古文の鋭）としている。金文では炉火中の刀の形であり（字統）、刀を鋭くすることを意味しているようだ。芒は稲やすすきの突起状のもので、ここでは車が舞上げる塵がむくむくと盛り上がるさま。■卑\*1は、説文に、「賤なり。事を執るものなり。ナ甲に従ふ。補移切〖注〗徐鍇が曰く、“右重くして左卑しき、故に甲の下に在り”」となる。金文においては卑には賤しい意味はなく、酒を酌む匕杓と手の形であり、使役の動詞として用いられたことから、下、低い、劣る意味に用いられ高卑で高低を意味したようである。■廣は、説文に、「殿の大屋なり」とあり、注に、「廣雅に曰く、堂堭、合殿なり。殿は堂にして四壁無きを謂ふ」とある。水平的なひろがりで、ここでは大軍の歩兵の行進が起こす塵の水平的な広がり。■散は筋肉の形と攴（殴打する）からなり、筋腱の堅い肉を撃って柔らかくすることが原義でバラバラにすること、條達は、杜牧 注では、「縱橫の斷絶の貌なり」とあり、塵があちこちで、断続的に起こるさま。■樵採は柴刈り、料理用の薪の調達、宿営の準備である。■塵が少しで、行ったり来たりするのは、軽騎が場所を物色しており、宿営のためという。
\*1
、、、、、、、、、、、、　辞（ことば）卑（ひく）くして備えを益（ま）すは、進むなり。辞（ことば）疆（つよ）くして進駆（しんく）するは、退（しり）ぞくなり。軽車まず出（い）でてその側（かたわら）に居るは、陳（じん）するなり。約（やく）なくして和（わ）を請（こ）うは、謀（はか）るなり。奔走して兵車を陳（つら）ぬるは、期（き）するなり。半進半退するは、誘（さそ）うなり。
■辭は、神に弁解をなす詞が原義であり、ここでは軍使が敵将に弁明する辞を想定している。卑は相手に対して下手にでること、油断をさせる詭詐という。■益備は累を高く、溝を深くするような行為を増強すること、これも守ると見せかけ、奇襲してくる危険がある。■疆qiángは、説文に、「本は畺と作る、界なり」とあり、畺は田と田の区切り。弓と土が付されているのは、弓が六尺であることからその単位で計測したとか放った矢の落下した処を堺としたとか諸説があるようだ。境界を争う動詞ともされる。強qiángの意味でも用いられる。強は弘と虫からなり、説文では、その虫を刺す力の鋭いアブとするが、虫は蚕であり、弓の弦により固めて松脂を塗り込んだ絹糸が用いられ、強度の増した弓とされるようでもある。辞が疆とは、境界を争う交戦的なものとなる。■驅は駆除の駆であり、悪邪を祓うことが原義である。交戦的で突進するのは見せかけで、退却を目論む。■輕車先出虚其側、戦車は二十五輌を偏とし、一車輌に伍（五人の歩卒）が従う。一偏（25戦車125歩卒）。この形で戦車が両サイドに動きだすのは布陣を意味する。■約\*1は、説文に、「纏束（てんそく）なり。糸に従い勺声」とあり、糸で縛り合わせること。言語、文字により相互が遵守すべき条件を定め、双方を拘束すること。約無き和とは、故無き和とされる。遵守すべき内容が明示されず、利や不利により停戦を請うもの。時間かせぎ、相手の油断を誘うなど謀略がある。■期は、説文に、「會ふなり。月に従い其声」とあり、月が一巡して会う、月の周期と解されているが、金文\*2では、日に従っており特定の日時に会するとする、「周礼」に「車驟（は）せ徒趨（はし）りて、表に及び乃ち止る」とあり、この表を期、すなわち旗とする。ここでは、戦車が驟せ旗を立てた処に歩卒が駆け集まり布陣をすると解されている。■半進半退は、攻撃したものが、退却すると見せかけ、相手を誘い出し、叩く戦法となる。半分が前進、半分が後退は考えづらい。
\*1\*2
、、、、、、、、、、、、、、、、　杖（つえ）つきて立つは、飢（う）うるなり。汲（くみ）てまず飲むは、渇（かつ）するなり。利を見て進まざるは、労（つか）るるなり。鳥の集まるは、虚（むな）しきなり。夜呼ぶは、恐るるなり。軍の擾（みだ）るるは、将（しょう）の重からざるなり。旌旗（せいき）の動くは、乱るるなり。吏（り）の怒るは、倦（うみ）たるなり。
■杖は、説文に、「持つなり、木に従い丈声」とあり、注に、「凡そ持つ可きは人が持つ皆に及びて杖と曰ふ」とある。儀仗から兵仗すべてに用いられ、ここでは兵器に寄りかかって立つこと。■汲而先飲、水を汲みに出た者達が先に水を飲むこととも汲む前に水を飲むことともとれる。■鳥集、陣営や砦の上に鳥が集まっていること。敵はそこから既に退却している。■夜呼と軍擾は、共に将軍に対する信頼感の欠如の様相。■旌旗動の動は、静止しているべき旌旗が動の状態にあること。中国の戦では万、十万単位の軍を動かすため、旌旗により約分し、旌旗の動きによって戦況を把握することになる。しかるべき位置を確保すべき隊の旌旗が安定していなければ乱戦状態にあろう。■吏は役人、軍では士官、倦は人が疲労して身を屈して休息する姿勢、兵士が動けないので士官がイライラして怒りっぽくなっている。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、　馬を粟（ぞく）して肉食するは、軍に糧（りょう）なきなり。缻（ふ）を懸（かけ）てその舎（しゃ）に返らざるは、窮寇（きゅうこう）なり。諄諄翕翕（じゅんじゅんきゅうきゅう）として、徐（おもむろ）に人と言（い）うは、衆を失うなり。しばしば賞するは、窘（くる）しむなり。しばしば罰するは、困（くる）しむなり。先（さき）に暴にして後（のち）にその衆を畏（おそ）るるは、不精（ふせい）の至りなり。来たりて委謝（いしゃ）するは、休息を欲するなり。兵怒りて相（あい）迎え、久しくして合（がっ）せず、また相（あい）去らざるは、必ず謹（つつし）みてこれを察（さっ）せよ。
■粟、古代には粟米を俸禄として支給した。粟馬は馬にも残存する穀類を食わせること。肉食は、輜重を引く牛馬を殺して肉を食すこと。最終決戦に挑む兆候。■缻は煮炊きする土器。懸缻不返其舎は、缻が懸けられたまま放置され兵営にも戻さないと解せるが、通典（唐の杜佑著；制度史）、御覧（宋代の太平御覧）では、「軍無懸缻、不返其舎者」とし懸けられた缻が無い（破壊した）とし、兵が兵営に戻らず（野営した）とする。■窮寇は窮地に陥った敵人のこと。■諄諄は辛抱強く懇切丁寧なことであるが、ここでは簡潔明快でなく、くどくどとして分かりにくいこと、翕翕は和合する様であるが、ここでは、前後のつじつまが合わないこと。徐は緩慢なこと。軍にあってはくどくど、出任せで、だらだらと話す士官からは、卒の心は離れる。曹操は、「諄諄は語る貌。翕翕は志を失う貌」としている。■數shùでは数であるが、shuòでは数次「しばしば」の義。■窘jiǒngは穴と君からなり、jǔnの音もある。君jūnは群qúnに通じ集まる義がり、窘は穴に集まり身動きがとれないことから、追い込まれて苦しむ、窮迫、窮困の義となる。■困は、枠に木をはめて、出入りをとめられ苦しむこと。數賞は士気を高める、數罰は士気を保つための方策だが、困窮していること。■先暴而後畏其衆者、①先に敵衆を軽んじ、後に恐れる　②暴威により衆を恐れさせ、その衆が離反することを後におそれるという二方向の註釈となっている。■不精、この場合の精は聡明、深く考える義であり、不精之至は「あさはかのきわみ」。■委謝、は委贄謝罪（礼物を捧げて謝罪する）、萎謝（萎縮して謝罪する）こと。■相去の相にはxiāng相互とxiàng様子; 察看の二音がある。xiāngと解すると、相迎はお互いが迎えること、不相去はお互い去らずとなる。相互に迎撃せず、しばらくしても合戦にならない。相互に退却もしない、となる。意味がとりづらい。xiàngと解すると、兵はいきりたっているが敵が迎撃するかを見守り、合戦にならない、また、去る様子もないとなる。それは、奇襲、伏兵などの恐れがあり、慎重に対処すべきという。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、　兵は多きを益（えき）とするにあらざるなり。ただ武進（ぶしん）することなく、もって力を併（あわ）せて敵を料（はか）るに足らば、人を取らんのみ。それただ慮（おもんぱか）りなくして敵を易（あなど）る者は、必ず人に擒（とりこ）にせらる。卒（そつ）、いまだ親附（しんぷ）せざるにしかもこれを罰（ばっ）すれば、すなわち服せず。服せざればすなわち用い難（がた）きなり。卒（そつ）すでに親附（しんぷ）せるにしかも罰（ばつ）行なわれざれば、すなわち用うべからざるなり。ゆえにこれに令（れい）するに文をもってし、これを斉（ととの）うるに武をもってす。これを必取（ひっしゅ）と謂う。令、素（もと）より行なわれて、もってその民を教うれば、すなわち民服（ふく）す。令、素（もと）より行なわれずして、もってその民を教うれば、すなわち民服（ふく）せず。令、素（もと）より行なわるる者は、衆と相（あい）得（う）るなり。
■益、水が器からあふれでている様であり、豊かなことであるが、本来からすれば、余分でもある。衆が寡に勝るのが孫子の兵法であるが、衆であれば勝てるとは限らない。■武進、武勇を恃みにして冒進すること。■足足と正正は金文では字形が似ており混同し易く、甲骨文字では足は正の意味でも用いられた。正にはzhèngとzhēngの二音があり、字形は□と止からなり邑に進撃する形であり、正zhēngした側が正zhèngとされた。正が正しい義となると征服として征zhēngが別字として用いられた（字統）。■併は一体になること。■料は米を斗（ます）にピッタリ充たす形、正確に計量すること。料理とは前後の筋道を正しくすることが原義、後に調理と同義となる。足併力料敵、（寡であっても、）敵の強弱を観察し、勝てる処に自らの力を結集すればよい。■取人　人選をする、援軍を得る、雑兵でよい、など解釈が分かれる。併力料敵、足以取人而已とし、十分に勝利するとするテキストもある。以才取人とは才能により人を採用すること、ここでは、相応しい兵を組織すること。■易は多義、事象の変転の相を究明するものが「易」、変易、容易、交易、平易（和悦）、貴貨易土（軽慢）、易墓（墓の除草）等々。ここでは、軽慢の義。■親附は親近依附、親しんで付き従うこと。■不可用、そのような卒は統制がとれず用うべからずと釈される。また、そのような将も用うべからずとなる。■令之以文、斉之以武、斉はqíで整える、等しくする、完全にすること、jìでは調味品、合金のこと。曹操は文を仁、武を法と釈した。李筌は文を仁恩、武を威罰と釈した。命令を発する将に卒が仁心を感じ、卒を統率するには公平に賞罰を行うことが不可欠とする。令を合とするテキストにより、仁恩で卒の力を合わすとするもある。令之以武、斉之以文とするテキストもあるが、意味は通るが、軍では文で兵士の練度整えるものではない。■是謂必取を「これを必勝と謂う」と釈すようであるが、令と斉のこの原則を必ず採り入れよ、さもなくば令も斉もおぼつかないであろう。■令素行を「令素信著」、「令素信」と「行」を「信」とするテキストがある。令を卒が信ずならば、となろう。素とは、糸を染めるに束ね堅く縛った部分が染まらず、生地のままであることをいう。令がそのままに伝わり行われること。その状態で教えるならば、教えたことに従う。令不素行は伝わる間に潤色されそのままに行われないこと。その状態で教えても、教えたことがそのまま伝わらず、乱れる。令素行であればこそ、将は卒を得ることができる。

**宋刊十一家註孫子**（[HP](http://www.cos.url.tw/sunzi/10man.htm)）（注釈者のプロフィールについては、古典ぱん（[HP](https://k10p.net/?p=1253)）に詳しい）

〈行軍〉篇

曹操曰く、便利を擇びて行くなり。
王晳曰く、行軍は當に地の便に據りて、敵情を察すなり。
張預曰く、九地の變を知り、然る後に以て利を擇びて行軍す可し。故に〈九變〉に次ぐ。

（孫子曰：凡處軍、相敵：）
王晳曰く、處軍は凡そ四つ有り、相敵は凡そ三十有一。
張預曰く、「絕山依谷」より「伏姦之所處」に至るは、則ち處軍の事なり。「敵近而靜」より「必謹察之」に至るは、則ち相敵の事なり。相は猶察のごとし、料なり。

（絕山依谷，）
曹操曰く、水草の利便に近きなり。
李筌曰く、軍は我、敵は彼なり。其の依りて止（とどま）るを相（み）るは、則ち勝敗の數、彼我の勢を知る可きなり。絕山は守險なり。依谷は水草に近し。夫れ營壘を列（つら）ねるは、必ず先ず卒を分けて隘を守り、畜牧を縱（はな）ち、樵採を收（おさ）めて後に寧（やす）し
杜牧曰く、絕は過なり。依は近なり。言うは、行軍は山險を經過し、須べからく谷に近く水草の利有るべし。吳子曰く、「天竈大谷の口に當ること無かれ」と。言うは、谷に當る可からず、但に谷の近くに處る可きなり。
賈林曰く、兩軍が敵に相い當れば、利を擇びて動くべし。絕山は跨山、依谷は傍谷なり。山を跨（こえ）れば、後に患無し。谷に依れば、水草有り。
梅堯臣曰く、前に山を為せば隔たる所、則ち谷に依りて以て固を為す。
王晳曰く、絕は度なり。依は附近を謂うのみ。曹公曰く、「水草の便利に近きなり」と。
張預曰く、絕は猶越とすべし。凡そ行軍は山險を越過し、必ず溪谷に依り附きて居る。一に則ち水草の利、一に則ち險固を負う。後漢の武都を羌が寇を為し、馬援が之を討つ。羌は山上に在り、援は便地に據り、其の水草を奪い、戰に與（くみ）せず。羌は窮困し、悉く降る。羌は依谷の利を知らざるなり。

（視生處高，）
曹操曰く、生は陽なり。
李筌曰く、陽に向い生を同じくす。山に在れば曰高し。生高の地、居る可し。
杜牧曰く、言うは、須べからく高に處りて南に面すべし。
陳皥曰く、若に地に東西有れば、其の法は何如？答えて曰く、然らば則ち東に面せ。
賈林曰く、陽に居るを生と曰う。生を視るとは、物を蔽冒す無しと為す。軍を處くに當に高に在るべし。
杜佑曰く、高は陽なり。視は目前の生地を謂う。軍を處くは當に高に在るべし。
梅堯臣曰く、若し陵の上に在れば、必す陽に向いて居る。高に處れば、便に乘るなり。
張預曰く、視生は、陽に面すを謂う。軍を處くに當に高阜に在るべし。

（戰隆無登，）
曹操曰く、高を迎うこと無かれ。
李筌曰く、敵が高より下れば、我は登りて之を取ること無し。
杜牧曰く、隆は高なり。言うは、敵人が高に在り、我は下より高に往く可からず、敵人を迎えて接戰す。一に「戰降無登」と作す。降は下なり。
賈林曰く、戰は（勢に）乘りて下るべし、高を迎える可からず。
杜佑曰く、高を迎えること無かれ。降は下なり、山の下を謂う。山下に戰い、敵は之を引きて山に上らしむ。登りて逐うこと無かれ。
梅堯臣曰く、敵が地の高に處れば、登りて戰う可からず。
張預曰く、敵が隆高の地に處れば、登りて迎えて戰に與す可からず。一る本に「戰降無登迎」と作す、謂うは、敵が下山して來戰し、我を上山に引かば、則ち登りて迎える可からず。

（此處山之軍也。）
梅堯臣曰く、山に處るは、當に此の三者を知るべし。
張預曰く、凡そ高くして崇すは、皆て之（これ）山を謂う。山に處りて敵を拒ぐ、以上三事を法と為（す）。

（絕水必遠水，）
曹操、李筌曰く、敵を引きて渡らしむ。
杜牧曰く、魏將の郭淮は漢中に在り、蜀主の劉備は漢水を渡りて來攻せむと欲（す）。諸將は眾寡を議して敵せず、水に依りて陳を為し以て之を拒まんと欲（す）。（郭）淮が曰く、「此れ弱を示して敵を挫（くじ）くに足らず、水に遠（はなれ）て陳を為すに如かず、引きて之を致せ。半ば濟（わた）りて後に擊て、（劉）備を破るべし」と。既に陳を列（つら）ねれば、備は疑いて、敢えて渡らず。
梅堯臣曰く、前に水は隔てる所、則ち水を遠れ以て敵を引く。
王晳曰く、我は水を絕（わた）るなり。曹說は是なり。
張預曰く、凡そ行軍して水を過ぐに、舍止を欲す者は、必ず水を去ること稍（やや）遠れるべし。一に則ち敵を引きて渡らしむ。一に則ち進退を礙す（妨げる）こと無し。郭淮は水を遠れて陳を為し、劉備は之を悟りて是を渡らず。

（客絕水而來，勿迎之於水內，令半濟而擊之，利；）
李筌曰く、韓信が龍且（りゅうしょ）を濰水に殺し、夫概（ふがい）が楚子を清發で敗るは是なり。
杜牧曰く、楚と漢とは相持し、項羽は自ら彭越を擊ち、其の大司馬の曹咎をして成皋を守らしむ。漢軍は戰を挑み、咎は汜水を涉りて戰う。漢軍は半ば涉るを候いて擊ち、大いに之を破る。「水內」は乃ち「汭（河川が合流したり弯曲している所）」なり、誤りて「內」と為すのみ。
梅堯臣曰く、敵の方來は、水濱に迎える、則ち渡らず。
王晳曰く、「內」當に「汭」と作（な）す。水汭に迎えば、則ち敵は敢えて濟らず。遠くば則ち利に趨りて及ばず、當に其の宜を得べし。
何氏曰く、春秋時の如きは、宋公は楚人と泓に戰うに及ぶ。宋人は既に列を成し、楚人は未だ既にして濟らず。司馬が曰く、「彼は眾我は寡、其れ未だ既にして濟らずに及ぶ。之を擊つを請う」と。公の曰く、「不可」、既にして濟りて未だ列を成さず。又以て告す。公の曰く「未だ可ならず」と。既にして陳して後之を擊て。宋師は敗績し、公は股に傷つき、門官（宋公の左右）は殲（ほろ）ぶ。宋公は之を違え、故に敗れる。吳が楚を伐ち、楚師は敗れ、清發に及ぶ。將に之を擊たむとし、夫概王が曰く、「困獸は猶鬬うべし、況や人をや？若し免れず死に致ると知れば、必ず我を敗る。若し先に濟らしめば免れるを知り、後は之を慕い、鬬心有るを蔑しむ。半ば濟りて後に擊つ可し」と。之に從いて、又之を敗る。魏將の郭淮は漢中に在り、蜀主の劉備は漢水を渡りて來攻せむと欲（す）。時に諸將等が議して曰く、「眾寡は敵せず」と。水に依りて陳を為し以て之を拒まむと欲（す）。淮が曰く、「此れ則ち弱を示し、而して以て敵を挫くに足らず、算に非らず。水を遠れて陳を為すに如かず。引きて之を致し、半ば濟りて後に擊てば、備を破る可し」と。既にして陳せば、備は疑いて、敢えて渡らず。唐武德中に、薛萬均（せつばんきん）と羅藝（らげい）は幽燕を守る。竇建德（とうけんとく）は眾十萬を率て范陽を寇す。萬均が藝に謂りて曰く、「眾寡敵せず、今若し出でて鬬わば、百戰して百敗す。當に計を以て之を取る。羸兵（疲弱な士兵）弱馬をして阻水を背に城に陳を為し以て之を誘わしむ可し。賊が若し水を渡りて兵を交えば、請う、公は精騎百人を城側に伏せ、其の半ば渡るを待ちて之を擊つを」と。之に從う。建德は水を渡り、萬均は之を擊破す。
張預曰く、敵が若し兵を引きて水を渡り來戰せば、之を水邊迎える可からず。其れ半ば濟るを俟ちて、行列未だ定まらず、首尾接せざるに、之を擊てば必ず勝つ。公孫瓚（こうそんさん）が黃巾賊を東光に敗り、薛萬均が竇建德を范陽に破るは、皆て此の術を用うなり。

（欲戰者，無附於水而迎客；）
曹操曰く、附は近なり。
李筌曰く、水に附きて客を迎えば、敵は必ず渡りて我と戰うを得ず。
杜牧曰く、言うは、我用て戰わむと欲（せ）ば、水に近づきて敵を迎える可からず。敵人を恐れて我を疑いて渡らず。義は上と同じ、但に客主の詞が異なるのみ。
杜佑曰く、附は近なり。水に近くして敵を待てば、得て渡らず。
梅堯臣曰く、必ず戰わむと欲（せ）ば、亦、水から遠（はなれ）るに若（し）くは莫し。
王晳曰く、我が利が戰うに在れば、則ち當に差（いささか）遠ざかるべし。敵をして必ず渡らしめて之と戰うなり。
張預曰く、我必ず戰わむと欲（せ）ば、水に近づきて敵を迎うこと勿れ、恐れて其れ渡るを得ず。我戰うを欲せずんば、則ち水を阻（はば）み之を拒（こば）み、能く濟らしめず。晉將の陽處父と楚將の子上は泜水を夾みて軍す。陽子（處父）は退きて舍し、楚人をして渡らしめむと欲（す）。子上も亦、退きて舍し、晉師をして渡らしめむと欲（す）。遂に皆て戰わずして歸る。

（視生處高，）
曹操曰く、水上（川上）は亦當に其の高に處るなり。前に水に向い、後に當に高に依りて之に處る。
梅堯臣曰く、水上は亦高に據りて陽に向う。
王晳曰く、曹公が曰う「水上亦當處其高」は晳が謂うに、近水の地を謂うに非ず。下に曹註に云う、「我を溉す（押し流す）を恐る」なり、疑は當に此の下に在り。
何氏曰く、視生は向陽、遠視なり。軍が高に處れば、遠くに敵勢を見る。則ち敵人は潛來して我が不意に出づることを得ず。
張預曰く、或いは岸邊に陳を為し、或いは水上に舟を泊む。皆て須べからく陽に面して高に居る。

（無迎水流，）
曹操曰く、我を溉すを恐る。
李筌曰く、我を溉すを恐る。智伯は趙襄子を灌し、光武は王尋を潰すは、水を迎えて高に處りて乃ち之を敗る。
杜牧曰く、水流の下に就く、卑下に軍を處く可からず。敵人が開決し、我を灌浸すを恐る。上文に云う「視生處高」なり。諸葛武侯曰く、「水上の陳は、其の流に逆らわず」と。此れが言うは、我軍の舟船は、亦、下流に泊す可からず。敵人得て以て流に乘りて我に薄（せま）るを言う。
賈林曰く、水流の地、以て吾軍を溉す可し、以て毒藥を流す可し。迎は逆なり。一に云く、流に逆いて軍を營すは、兵家の忌む所。
梅堯臣曰く、下流に軍すこと無く、其の決灌を防げ。舳艫の戰は、逆せば亦便に非ず。
王晳曰く、當に上流に乘ずべし。魏の曹仁が吳に征し、濡須の洲中を攻めむと欲（す）。蔣濟曰く、「賊は西岸に據り、船を上流に列ねる。而るに兵を洲中に入れるは、是を自內地獄（自ら地獄の中に入るようなもの）と謂う、危亡の道なり」と。仁は從わずして敗れる。
何氏曰く、流に順いて戰えば、則ち易く力と為る。
張預曰く、卑地に居る勿れ、決水が我を溉すを恐る。舟戰は、亦、下流に處る可からず。以て彼が沿（流れに従う）し我が泝し（流れに逆らう）て戰うは便ならず。兼ねて敵人が毒を上流に投ずを慮る。楚の令尹が吳を拒むに、戰を不吉と卜す。司馬の子魚曰く、「我は上流を得て、何故不吉や」と。遂に戰を決して、果して勝つ。是、軍は須べからく上流に居るべきなり。

（此處水上之軍也。）
梅堯臣曰く、水上に處り、當に此の五者を知るべし。
張預曰く、凡そ水に近くして陳を為すは、皆て水上の軍を謂う。水上に敵を拒むは、以上の五事を法と為せ。

（絕斥澤，惟亟去無留；）
陳皥曰く、斥は鹹鹵（かんろ；塩分が多い）の地。水草惡く、漸洳（ぜんじょ；低湿）なるは軍を處く可からず。『新訓』に曰く、「地固より斥澤ならば、五穀を生ぜず」とは是なり。
賈林曰く、鹹鹵の地、多（まさ）に水草無く、久しく留る可からず。
梅堯臣曰く、斥は遠なり。曠蕩（広大）にして守り難し、故に留る可からず。
王晳曰く、斥は鹵なり。地が廣く且つ下であれば、而して依る所無し。
張預曰く、〈刑法志〉に云く、「山川沈斥」と。顔師古が註に曰く、「沈は深水の下、斥は鹹鹵の地」と。然れば則ち「斥澤」とは、瘠鹵漸洳（瘠せて塩分の多い低湿）の所を謂う。以て其の地が氣は濕潤、水草は薄惡（貧瘠）、故に急ぎて過ぐべし。

（若交軍於斥澤之中，必依水草而背眾樹；）
曹操曰く、已むを得ずして斥澤中に敵と會す。
李筌曰く、急ぎて過ぐを得ずんば、戰うに必ず水に依り樹を背にす。夫れ水樹有れば、其の地は陷溺（かんでき；はまり溺れること）無きなり。
杜牧曰く、斥鹵の地には、草木生ぜず、之を飛鋒と謂う。言うは、此に忽（にわか）に敵に遇えば、即ち須べからく水草林木有るを擇びて而して之に止むべし。
杜佑曰く、一本に「背眾木」と作る。言うは、已むを得ずして敵と戰い、斥澤の中に會せば、當に稠樹を背にして以て固守す。蓋し地の利は、兵の助なり。
梅堯臣曰く、已むを得ずして敵と會せば、則ち水草に近くに依り、眾木を背にして倚れ。
王晳曰く、猝（にわか）に敵と此に遇えば、亦、必ず利に就きて固を背にすなり。
張預曰く、已むを得ずして此の地に兵と會えば、必ず水草に近きに依り、樵汲（薪作りと水汲み）に便すを以て、林木を背にして倚り、以て險阻と為せ。

（此處斥澤之軍也。）
梅堯臣曰く、斥澤に處れば、當に此の二者を知るべし。
張預曰く、斥澤の地に處れば、以上の二事を法と為せ。

（平陸處易，）
曹操曰く、車騎の利なり。
杜牧曰く、言うは、平陸に於て、必ず其の中に坦易平穩の處を擇びて以て軍を處き、我が車騎をして以て馳逐すを得しむ。
王晳は曹操が註に同じ。
何氏は杜牧が註に同じ。
張預曰く、平原廣野は車騎の地。必ず其れ坦易無坎陷の處を擇び以て軍を居くは、馳突に於ける利が所以なり。

（而右背高，前死後生，）
曹操曰く、戰の便なり。
李筌曰く、夫れ人の利用は、皆て右に便し、是れ以て之を背にす。前死は敵に致る地。後生は、我自す處。
杜牧曰く、太公曰く、「軍は必ず川澤を左とし丘陵を右にす」と。死は下なり。生は高なり。下は以て高を禦ぐ可からず、故に戰は軍馬に便す。
賈林曰く、崗阜を生と曰い、戰地を死と曰う。崗阜を後にせば、軍を處きて穩なり。前に地を臨めば、用兵に便なり。高は右に在れば、回轉に順なり。
梅堯臣曰く、其れ坦易を擇べば、車騎に便利なり。右に丘陵を背にせば、勢則有憑（相勢いを保つ）。前低く後隆（たか）ければ、戰に便す。
王晳曰く、凡そ兵は皆て陽に向うべし。既に後に山を背にせば、即ち前は生き、後は死す。疑うらく文の誤りなり。
張預曰く、是れ平陸と雖も、須べからく高阜有れば、必ず右にし之を背にすは、形勢を為す者を恃む所以なり。前が低後が高は、奔擊に便す所以なり。

（此處平陸之軍也。）
梅堯臣曰く、平陸に處れば、當に此の二者を知るべし。
張預曰く、平陸の地に居れば、以上の二事を法と為すべし。

（凡此四軍之利，）
李筌曰く、四とは、山、水、斥澤、平陸なり。
張預曰く、山、水、斥澤、平陸の四軍なり。諸葛亮曰く、「山陸の戰は其の高きに升らず。水上の戰は其の流れに逆らわず。草上の戰は、其の深きを涉らず。平地の戰は其の虛（丘）に逆らわず。此れ兵が利なり」と。

（黃帝之所以勝四帝也。）
曹操曰く、黃帝始めて立つや、四方の諸侯、帝を稱さざること無し、以て此の四地、之に勝つ。
李筌曰く、黃帝始めて兵法を風后より受け、而して四方を滅ぼす。故に曰く、「四帝に勝てり」と。
梅堯臣曰く、「四帝」は當に「四軍」と為すべし。字の誤りか？言うは、黃帝四者の利を得る。山に處りて則ち山に勝ち、水上に處りて則ち水上に勝ち、斥澤に處り則ち斥澤に勝ち、平陸に處りて則ち平陸に勝つなり。
王晳曰く、「四帝」或は曰く當に「四軍」と作すべし、と。曹公曰く、「黃帝始立，四方諸侯無不稱帝，以此四地勝之也」と。一る本に、「無」を「亦」と作（な）す。
何氏曰く、梅氏の說は之を得る。
張預曰く、黃帝始めて立つや、四方の諸侯亦帝を稱し、以て此の四地、之に勝つ。按ずに〈史記．黃帝紀〉に云く、「炎帝と阪泉（はんせん）に戰い、蚩尤（しゆう）と涿鹿（たくろく）に戰い、北に葷粥（くんいく）を逐う」と。又太公《六韜》に言く、黃帝七十戰して天下を定む、と。此れ即ち是れ四方の諸侯の戰有り。兵家の法は、皆て黃帝より始まり、故に然（しか）云う。

（凡軍好高而惡下，）
梅堯臣曰く、高は則ち爽塏（明るく乾燥している）、安和の所以であり、亦以て勢に便す。下は則ち卑濕（低く湿っている）、疾（疾病）を生ず所以であり、亦以て戰い難し。
王晳曰く、降有れば登る無かれ、且（また）水に遠くば患うなり。
張預曰く、高に居れば則ち覘望（偵察）に便し、馳逐に利す。下に處れば則ち以て（堅）固と為すに難く、以て生疾に易し。

（貴陽而賤陰，）
梅堯臣曰く、陽に處れば則ち明るく順（したが）う、陰に處れば則ち晦（くら）く逆（さから）う。
王晳曰く、久しく陰濕の地に處れば、則ち憂疾を生じ、且軍器を弊（害）す。
張預曰く、東南を陽と為し、西北を陰と為す。

（養生而處實，）
曹操曰く、滿實を恃むなり。生を養うとは、水草に向い、放牧して畜乘を養う可し。實は猶高のごとし。
梅堯臣曰く、生を養うは、水草に便すこと。實に處るは、糧道に利すこと。
王晳曰く、生を養うは、謂水草糧糒の屬を、謂う。實に處るは、（堅）固に倚るを謂う。
張預曰く、生を養うは、善き水草放牧に就くを謂う。實に處るは、隆高の地に倚りて居るを謂う。

（軍無百疾，是謂必勝。）
李筌曰く、夫れ人が卑下に處れば必ず癘疾す（流行性伝染病にかかる）、惟（ただ）に高陽の地に居る可し。
杜牧曰く、生は陽なり。實は高なり。言うは之を高に養えば、則ち卑濕（低く湿っている）陰翳（日陰で暗いこと）すること無し。故に百疾は生じず、然る後に必ず勝つ可し。
梅堯臣曰く、能く上の三者を知れば、則ち勢いて勝つこと可必（必ず然り）、疾氣は生じず。
張預曰く、高に居りて陽に面せば、生を養うに厚き處、以て必ず勝つ可し。地の氣は乾熯（日照り乾燥す）す、故に疾癘（流行性伝染病）は作（おこ）らず。

（丘陵隄防，必處其陽，而右背之。）
杜牧曰く、凡そ丘陵隄防（堤防）の地に遇えば、常に其の東南に居るなり。
梅堯臣曰く、高に至るに非ずと雖も、亦當に前は明に向きて右は實に依る。
王晳曰く、陽に處れば則ち人は舒し（伸びやかにする）以て和す、健を器（重視する）せば以て利すなり。
張預曰く、陽に面すは明顯を貴ぶ所以にして、高所を背にすは以て險固を為す。

（此兵之利，地之助也。）
梅堯臣曰く、兵が利す所は、形勢を得て以て助と為（す）。
張預曰く、用兵の利とは、地の助を得ること。

（上雨，水沫至，欲涉者，待其定也。）
曹操曰く、恐るらく半ば涉りて水遽（にわか）に漲（水位を増す）なり。
李筌曰く、恐るらく水は暴漲す。
杜牧曰く、言うは、溪澗（山間の水流）過ぎ、上流を見れば沫有るは、此乃ち上源に雨有り、其の沫盡きて水定まるを待ちて、乃と涉る可し。爾（しか）らずんば、半ば涉りて、恐るらく瀑水有りて卒に至る。
杜佑曰く、恐るらく半ば水を渡りて遂に漲す。上に雨せば、水當に清し、而るに反りて濁沫至るは、此敵人の上の遏水（止めた水流）の占（推測）なり。以て軍を中絕（中断）せむと欲（す）。凡そ地に水が漲欲（す）こと有れば、沫先に至る、皆て軍を絕つが為に、當に其れ定まるを待つなり。
梅堯臣曰く、流沫未だ定まらずは、恐るらく暴漲有り。
王晳曰く、水が漲せば則ち沫す。涉は步いて濟るなり。曹說は是なり。
張預曰く、渡りて未だ濟り畢るに及ばずして、大水忽に至るなり。沫は水上の泡漚（あわだち）を謂う。

（凡地，有絕澗、）
前後は嶮峻にして、水（川）が其の中を橫ぎる。

（天井、）
四面は峻坂にして、澗壑の歸す所（谷水が溜まる所）。

（天牢、）
三面環絕す（三方巡って出口が分からない）、入に易く出るに難し。

（天羅、）
草木が蒙密（繁密）し、鋒鏑（鉾先と矢じり；武器）施すこと莫し。

（天陷、）
卑下（低地）が汙濘（汚泥）にして、車騎は通れず。

（天隙，）
兩山が相い向い、洞道は狹惡（間の道は極端に狭い）。六害は皆て梅堯臣が注。

（必亟去之，勿近也。）
曹操曰く、山が深く水が大なるは、絕澗と為（す）。四方が高く、中央が下（ひく）きは、天井と為。深山にして過ぐる所が蒙籠（草木が盛んに繁っている）の若きは、天牢と為。以て羅（あみ）して人を絕つ可きは、天羅と為。地形が陷るは、天陷と為。山澗（山間の水溝）の道が迫り狹く、地形の深さ數尺にして、長さ數丈なるは、天隙と為。
杜牧曰く、《軍讖》に曰く、「地形が坳下（山間の盆地）で大水が及ぶ所、之を天井と謂う。山澗が迫り狹く、以て人を絕つ可き、之を天牢と謂う。澗水が澄闊（済んで流量が多い）にして、淺深を測れず、道路が泥濘（泥沼状態）にして、人馬が通れない、之を天陷と謂う。地に溝坑、坎陷、木石多し、之を天隙と謂う。林木が隱蔽し、蒹葭（水辺の雑草）が深遠なる、之を天羅と謂う。」
賈林曰く、兩岸が深闊（深く流量が多い）にして、人の行くを斷つを絕澗と為（す）。下中の下、天井と為。四邊が澗險（流量が多く険しい）にして水草相兼（入り乱れ）、中央が傾側（傾斜し）、出入皆て難きを天牢と為。道路が崎嶇（凸凹で）、或いは寬く或いは狹く、細く澀（とどこお）り行き難きを天羅と為。地に沮洳（低湿）多きを天陷と為。兩邊が險絕にして、形は狹く長きこと數里、中間に人を通して行き難く、以て出入を絕塞す（完全に閉じる）可きを天隙と為。此れ六害の地にして、近づき背にす可からず。
梅堯臣曰く、六害には尚近づく、況や留る可からず。
王晳曰く、晳が謂う「絕澗」は當に「絕天澗」と作るべし、「天」字を脫すのみ。此れ六者は皆て自然の形なり。牢は獄牢を謂うが如し、羅は網羅を謂うが如きなり。陷は溝坑（みぞくぼみ）淤濘（どろぬかるみ）の屬を謂う、隙は木石が隙罅（隙間）の地の若きを謂い、軍が行きて此を過ぐに近づくこと勿れ、然らずんば、則ち脫すに不虞（予期せぬ事）有り、智力で施す所無し。
張預曰く、谿谷が深峻ならば、過ぐ可きこと莫しとは、絕澗の為なり。外高く中下（ひく）く、眾水が歸す所は天井と為（す）。山險しく環繞（囲み巡らす）し、入る所が隘なるは天牢と為。林木が縱橫し、葭葦（あしよし）が隱蔽するは天羅と為。陂地（沼地）泥濘（ぬかるみ）にして漸車凝騎（車が泥水につかり騎馬が立ち往生する）は天陷と為。道路が迫狹にして、地に坑坎（凸凹）多きは天隙と為。凡そ此の地に遇えば、遠く過ぐべきで不之に近づく可からず

（吾遠之，敵近之；吾迎之，敵背之。）
曹操曰く、兵を用うに常に六害を遠ざけ、敵を近づけ之を背にせしめ、則ち我は利し敵を凶す。
李筌曰く、善く兵を用う者は、敵に之を致し害の地を受けしむ。
杜牧曰く、迎は向なり。背は倚なり。言うは、此の六害の地遇えば、吾は之を遠ざけ、之に向うは、則ち進めば自由を止む。敵人が之に近づき、之に倚れば、則ち舉動に阻有り。故に、我には利にして敵には凶なり。
梅堯臣曰く、言うは、六害當に我をして遠ざけ、敵に附かしむべし。我が向えば敵は倚る、則ち我には利、敵には凶。
張預曰く、六害の地、我は既に之に遠ざかり、之に向せば、敵は自から之に近づき之に倚る。我は則ち行くこと止まりて利有り、彼は則ち進退多くして凶なり。

（軍行有險阻、潢井、葭葦、山林、蘙薈者，必謹覆索之，此伏姦之所處也。）
曹操曰く、險とは一（ある）は高く一は下（ひく）き地。阻とは多水なり。潢とは池なり。井とは下なり。葭葦とは眾草が聚る所。山林とは眾木の居る所なり。蘙薈とは屏蔽す可き處なり。此れ以上は地形を論ず。以下は敵情を相（み）るなり。
李筌曰く、以下は敵の奇伏誘詐を恐るなり。
梅堯臣曰く、險阻は隘なり、山林の產す所。潢井は下なり、葭葦の生る所。皆て蘙薈は以て蒙蔽すに足る。當に掩れ搜すべし、恐るらく伏兵有り。
張預曰く、險阻は丘阜の地、多く山林に生ず。潢井は卑下の處、多く葭葦を產す。皆て蘙薈は以て蒙蔽す可し。必ず之を降索（詳しく探索）し、兵が其の中に伏すを恐る。又、姦が細かに潛隱し、我が虛實を覘（み）て、我が號令を聽くを慮れ。「伏」、「姦」當に兩事と為すべし。

（敵近而靜者，恃其險也；）
梅堯臣曰く、近くして動かざるは、險に倚るが故なり。
王晳曰く、險を恃む、故に恐れず。

（遠而挑戰者，欲人之進也；）
杜牧曰く、近を以て我に挑むが若き、則ち相薄の勢有りて、我が進まざるを恐る、故に遠す。
陳皥曰く、敵人相近くして挑戰せざるは、其の守險を恃む。遠くして挑戰するが若きは、我を誘いて進ましめむとす、然る後に利に乘りて奮擊す。
梅堯臣は陳皥が註に同じ。
王晳曰く、人に致らむとす。挑は驍敵（強敵）を擿（えら）びて戰を求むを謂う。
張預曰く、兩軍相近くして終（つい）に動かざるは、險固に倚り恃みとす。兩軍相遠くして數（しばしば）戰を挑むは、我が進むを誘わむと欲（す）なり。尉繚子が曰く、「險を分つは、戰う心無し」と。言うは、敵人が先に險地を分得せば、則ち我は之と戰うこと勿きなり。又曰く、「戰を挑むは、全氣無し」と。言うは相去ること遠くば、則ち戰を挑みて我が進むを延（みちび）き誘う、即ち以て全氣にて之を擊つ可からず、此と法は同じなり。

（其所居易者，利也。）
曹操曰く、居る所が利なり。
李筌曰く、居り易き地とは、人を致らす利。
杜牧曰く、言うは、敵が險阻に居らず、而して平易に居れば、必ず以て事に便利なること有り。一る本に云く、「士が其の居る所を爭うは、利を易（おさ）むなり」と。
陳皥曰く、言うは、敵人が其の地の利を得るは、則ち將に士爭いて以て之に居らむとす。
賈林曰く、敵が居る所、地多く便利なれば、故に我に挑む。前（さき）に就（よしんば）己が便をして、戰わしめば則ち(敵は)易く其の利を獲る。慎しみて之に從う勿れ。。
梅堯臣曰く、居る所易きは利、故に來りて戰を挑む。
王晳は曹操が註に同じ。
張預曰く、敵人が險を捨てて易に居るは、必ず利有り。或（あるひと）曰く、敵が人の進むを欲すが故に平易に處り、以て利を示して我を誘うなり。

（眾樹動者，來也；）
曹操曰く、樹木を斬伐、除道し（切り倒し道を作り）進來すが故に動く。
梅堯臣は曹操が註に同じ。
張預曰く、凡そ軍は必ず善視者を遣して登高して敵を覘（うかが）う。若し林木が動搖するを見るは、是れ木を斬りて除道して來るなり。或曰く、除道止まずば、亦將に兵器と為るなり。晉人が木を伐り兵を益すは是の若きなり。

（眾草多障者，疑也。）
曹操曰く、草を結びて障（さしさわり）を為すは、我をして疑わしめむと欲（す）。
杜牧曰く、言うは、敵人或は壘を營して未だ成らず、或は軍を拔きて潛かに去り、我が來追すを恐れ、或は掩襲を為す（不意を襲う）。故に、草を結び往往にして相聚わしめ、人が伏藏する狀有るが如くし、我をして疑わしめ敢えて進ましめず。
賈林曰く、草を多（さわ）に結び障蔽を為すは、我をして疑わしめむと欲（す）。中に兵は必ずしも實ならず、別に攻襲せむと欲（す）。審びらかにして之に備うべし。
杜佑曰く、草を結びて障と為すは、我をして疑わしめむと欲（す）。稠草の中に多に障蔽すは、敵必ず避去し、追及を恐る。多に障蔽を作（な）すは、人をして伏有るを疑わしめむとす。
張預曰く、或は敵が我を追わむとし、多に障蔽を為し、留る形を設けて遁げ、以て其の追を避く。或は我を襲わむとし、草木を叢聚（聚集）して以て人屯を為す。我をして東に備えて西に擊たしむ。皆て疑を為す所以なり。

（鳥起者，伏也；）
曹操曰く、鳥が其の上に起（た）てば、下に伏兵有り。
李筌曰く、兵を藏（かく）すを伏と曰う。
杜佑曰く、下に伏兵有りて往きて藏れ、觸れて鳥驚きて起つなり。
張預曰く、鳥が適（たまたま）平に飛びて、彼に至りて忽（にわか）に高く起つは、下に伏兵有り。

（獸駭者，覆也。）
曹操曰く、敵が陳を廣げ翼を張るは、來りて我を覆うなり。
李筌曰く、不意にして至るを覆と曰う。
杜牧曰く、凡そ我を覆わむとす故は、必ず他が道の險阻、林木の中に由る。故に、起伏獸驅け駭（おどろ）きて逸（まぬが）るなり。覆は我を來襲すなり。
陳皥曰く、覆は、林木の內に隱れ、潛みて來りて我を掩す（不意に襲う）を謂う。兩軍の戰酣（戦闘の激烈時）を候い、或は其の左右に出で、或は其の前後に出でて、伏獸を驚駭す（驚愕せしむ）が若（ごと）し。
梅堯臣曰く、獸が驚きて奔れば、旁（かたわら）に覆有り。
張預曰く、凡そ人を掩覆せむとす（隠して不意を襲う）は、必ず險阻、草木の中に由りて來たる、故に起伏獸を驚かせ奔（に）げ駭（おどろ）くなり。

（塵高而銳者，車來也；）
杜牧曰く、車馬が行くこと疾（と）くば、仍ち須べからく魚貫（前後連なって魚群のごとし）、故に塵は高く尖（突出）す。
杜佑曰く、車馬が行くこと疾くば、塵は相い衝（つ）ぐ、故に高きなり。
梅堯臣曰く、蹄輪（馬蹄と車輪）勢重く、塵は必ず高く銳す（勢いがある）。
張預曰く、車馬行くこと疾くして勢重く、又、轍跡（わだち）は相次いで進む。故に塵埃は高起し銳直すなり（高く舞い上がる）。凡そ軍行は、須べからく探候の人が前に在すこと有りて、若し敵の塵を見れば、必ず馳せて主將に報(告)す、潘黨が晉の塵を望みて、騁（は）せて是を告げしむが如し。

（卑而廣者，徒來也；）
杜牧曰く、步人は行くこと遲く、以て並列す可く、故に、塵低く闊（ひろ）がる。
梅堯臣曰く、人が步むは低く輕く、塵は必ず卑（ひく）く廣がる。
王晳曰く、車馬は塵を起こすこと猛（たけ）く、步人は則ち差（やや）緩（ゆる）やかなり。
張預曰く、徒步は行くこと緩やかで跡は輕く、又、行列は疎遠。故に、塵は低くして來る。

（散而條達者，樵採也；）
李筌曰：煙塵の候、晉師が齊を伐つに、柴を曳きて之に從う。齊人が山に登り、望みて其の眾に畏れる。乃ち夜遁（よにげ）す。薪來が即ち其の義なり。此れ筌は「樵採」二字を以て「薪來」字と為（す）。
杜牧曰く、樵採は、各（おのおの）向く所に隨う、故に塵埃は散衍（四方に分散す）。條達は、縱橫に斷絕する貌なり。
梅堯臣曰く、樵採は隨處し、塵は必ず縱橫す。
王晳曰く、條達は、纖微（細微）に斷續す貌。
張預曰く、厮疫（厮役；下僕）を分遣し、隨處にて樵採す、故に塵埃は散亂し隧道（山中開道）を成す。

（少而往來者，營軍也。）
杜牧曰く、營壘を立てむと欲せば、輕兵を以て往來し斥候と為（す）、故に塵は少なし。
梅堯臣曰く、輕兵にして營を定むは、往來して塵は少なし。
張預曰く、凡そ栅を分け營すは、必ず輕騎を四面に遣わし近く其の地を視て、周く險易、廣狹の形を知らむと欲（す）、故に塵は微かにして來る。

（辭卑而益備者，進也；）
曹操曰く、其の使來りて辭卑くして、使が間して（こっそり）之を視るは、敵人が備を增すなり。
杜牧曰く、言うは、敵人の使來りて、言うこと辭卑くして遜くだるは、復（また）壘を增し壁を塗り、我を懼るが若きは、是我を驕らせ懈怠せしまんと欲（し）、必ず來りて我を攻む。趙奢は閼與（あつよ）を救う、邯鄲を去ること三十里、壘を增して進ず。秦の間（者）が來る。必（ふつく）に善く食して之を遣わす。間が以て秦將に報ずに、秦將果して大いに喜びて曰く、「閼與は趙が所有するに非ず！」と。奢は既にして秦間を遣わせ、乃ち倍道兼行して、秦の不備を掩いて、之を擊ち、遂に大いに秦軍を破る。
梅堯臣曰く、進まんと欲（す）は、外は則ち辭を卑くし、內は則ち備を益し、我に款（ねむごろに）す。
張預曰く、來りて辭を遜（へりくだ）らしむは、敵復（また）備を增し、我を驕らせて後に進まんと欲（す）。田單は即墨を守り、燕將の騎劫が之を圍む。單は身（みづから）版插（はんそう；建築用具）を操り、士卒と功を分ち、妻妾をして行伍の間に編し、散じて食し士を饗せしむ。乃ち女子をして城に乘らしめ、降を約す。燕は大いに喜ぶ。又民の金千鎰を收め、富豪を遣わしめ遺をして燕將に書して曰わしむ、「城は即ち降す。願わくば、妻妾を虜すこと無かれ」と。燕人は益（ますます）懈（おこた）る。乃ち兵を出だして擊ち、大いに之を破る。

（辭彊而進驅者，退也。）
曹操曰く、詭詐なり。
杜牧曰く、吳王の夫差は北に征し、晉の定公と黃池に會す。越王の句踐は吳を伐ち、吳晉方に爭うこと長く未だ定まらず。吳王懼れて、乃ち大夫を合せて謀りて曰く、「會無くして歸る、會に與して晉を先にす、孰れが利やと。」王孫雒が曰く、「必ず會して之を先にすと。」吳王の曰く、「之を先すとは若何」と。雒が曰く、「今夕必ず戰を挑めば、以て民心を廣め、乃ち能く至る」と。是に吳王は帶甲三萬人を以て、晉軍を去ること一里、天地に聲動す。晉使の董褐は之に視え、吳王は親ら對えて曰く、「孤の君に事えるは今日に在り、得て君に事えざるも亦今日に在り」と。董褐が曰く、「臣が吳王の色を觀るに、類すに大憂有り。吳將に我を毒（そこな）わんとす、戰に與（くみ）す可からず」と。乃ち先に歃を許ず（盟を為す）。吳王既に會し、遂に還る。
杜佑曰く、詭詐して驅馳し、畏る所無きを示す。是は退かんと欲（す）と知る。
梅堯臣曰く、退を欲すは、既にして詞を壯せしめ、兵は又彊く進み、我を脅す。
王晳曰く、辭を彊くし進む形を示して、我が其の去るを虞らずを欲す。
張預曰く、使が來りて辭は壯にして、軍は又前進すは、我を脅して退くを求めんと欲（す）。秦の行人（使者）夜に晉師を戒て曰く、「兩軍の士、皆て未だ愁えず。來る日に相見ゆを請う」と。晉の臾駢（ゆへい）が曰く、「使者が目は動きて言うこと肆（極）にして我を懼る」と。秦は果して宵に遁ぐ。

（輕車先出，居其側者，陳也。）
曹操曰く、兵を陳すは戰わんと欲（す）。
杜牧曰く、輕車を出し、先ず戰陳の疆界を定む。
賈林曰く、輕車が前を禦ぐは、陳を結びて來らんと欲（す）。
張預曰く、輕車は戰車なり。軍を其の旁に出し、兵を陳し戰わんと欲（す）。魚麗の陳を按ずに、偏を先にし伍を後にす。言うは、車を以て前に居り、伍を以て之に次ぐ。然らば則ち是戰を欲すもの、車先に其の側に出ず（偏は二十五輛の戦車、伍は五人の歩卒；25戦車125歩卒）。

（無約而請和者，謀也；）
李筌曰く、質盟の約無くして和を請うは、必ず人に謀ること有り。田單が騎劫を詐（あざむ）き、紀信が項羽を誑（たぶらか）す、即ち其の義なり。
杜牧曰く、貞元三年，吐蕃の首領の尚結贊は河曲を侵掠するに因りて、疫厲に遇い、人馬の死ぬ者は太半、回すこと得ざるを恐れ、乃ち詐りて侍中の馬燧に款懇を與え、因りて盟會を奏請す。燧は乃ち之に盟す。時に河中の節度使の渾瑊奏して曰く、「若し國家が境上に勒兵し、以て伐を謀りて計を為せば、蕃戎は盟を請い、亦之を聽きて信ず。今吐蕃は國家に求む所無くして、遽に盟會を請うは、必ず不實を恐る」と。上に納れず。渾瑊は眾二萬を率い、涇州の平涼縣に屯し、盟壇（締結盟約時に設ける壇場）縣の西三十里に在り。五月十三日、瑊は三千人を率いて壇所に會し、吐蕃は果して衷甲（衣の下に鎧を付けて）劫盟（脅迫締結盟約）す。
陳皥曰く、盟して相劫（おど）す、獨り國朝ならず。晉と楚とが宋に會し、楚人は衷甲し、晉を襲わんと欲（す）。晉人は之を知り、是以て信を失う。今言うは、約無くして和を請う、蓋し總論すに兩國の師、或は侵し或は伐ち、彼我皆て未だ屈弱せず。而るに故無く和を請うを好むは、此必ず敵人の國內に憂危の事有り、苟且（かりそめ）の暫安の計をせむと欲（す）。然らずんば、則ち我に可圖の勢有るを知り、疑わしめず、先ず和好を求め、然る後に我が不備に乘りて來りて取る。石勒の王浚を破る、先ず密に和好し、又臣は浚に服し、浚の疑わざるを知り、乃ち朝覲の禮を修むを請う。浚は之を許し、入るに及び、因りて浚を誅し之を滅ぼす。
杜佑曰く、未だ約を要すこと有らずして便（また）來りて和を請うは、間諜有り。
梅堯臣曰く、約無くして和を請うは、必ず姦謀有り。
王晳曰く、故無くして驟（にわか）に和を請うは、他を防ぎて謀らむとす。
張預曰く、故無くして和を請うは、必ず姦謀有り。漢の高祖は秦軍を擊たむと欲（し）、酈食其（れきいき）をして重寶を持たし其の將賈竪に啗（くら；利得で釣る）わしめ、秦將は果して和に連ならむと欲（す）。高祖は其の怠に因りて之を擊ち、秦師は大敗す。又、晉將の李矩は滎陽を守り、劉暢は三萬人を以て之を討つ。矩は使を遣わし牛酒を奉り降を請い、潛に精兵を匿し、其の弱卒を見せる。暢は大いに士卒を饗あい、人皆醉飽す。矩は之を夜襲し、暢は僅に身を以て免る。

（奔走而陳兵車者，期也；）
李筌曰く、戰に期有りて、將が用うに及び、是以て之に奔走す。
杜牧曰：上文「輕車先出，居其側者，陳也」は、蓋し先ず車を出し戰場の界を定め、旗を立て表とし、奔走して表に赴き、以て陳とす。旗は期なり。民と下に期す。《周禮》「大蒐」に曰く、「車が驟（は）せ徒が趨（はし）り、表に及び乃ち止る」と、是なり。
賈林曰く、尋常の期は、奔走に合わずして、必ず遠兵が相應ずに有り。晷刻（時刻）の期有りて、必ず欲勢を合わせて同じく來りて我を攻む。速やかに之に備うべし。
梅堯臣曰く、旗を立て表とし、奔り以て列に赴く。
王晳曰く、陳して民に期し、將は戰を求む。
張預曰く、旗を立て表とし、民と下に期す、故に奔走し以て之に赴く。《周禮》に曰く「車驟せ徒趨りて、表に及び乃ち止る」と、是なり。

（半進半退者，誘也。）
李筌曰く、前に散ず。
杜牧曰く、偽りて雜亂不整の狀を為し、我を誘いて進ましむなり。
梅堯臣曰く、進退が一ならず、以て我を誘わんと欲（す）。
王晳曰く、詭りの亂形なり。
張預曰く、詐りて亂形を為すは、是我を誘うばり。吳子が以て徒に不整を示すに囚りて、以て楚師を誘うの類の若し。

（杖而立者，飢也；）
李筌曰く、困して齊すこと能わず。
杜牧曰く、食せずば必ず困す、故に杖なり。一る本に、此「仗」字に從う。
杜佑曰く、仗矛戟に倚りて立つは、飢の意。
梅堯臣曰く、兵に倚りて立つは、飢弊の色を足見す（想像するに難くない）。
王晳曰く、仗に倚るは、困餒の相。
張預曰く、凡そ人は食せずば困す。故に兵器に倚りて立つ。三軍の飲食、上下時を同じくす。故に一人飢えば、則ち三軍皆然り。

（汲而先飲者，渴也；）
李筌曰く、汲みて未だ至らず、先に飲むは、士卒の渴。
杜牧曰く、之に水を汲むを命じ、未だ及まずして先に取るは、渴なり。一人を覩て、三軍を知る可し。
梅堯臣は杜牧が註に同じ。
王晳曰く、此を以て其の眾を見れば行驅に飢渴なり。
張預曰く、汲む者が未だ歸營に及ばずして先に水を飲む。是は三軍の渴なり。

（見利而不進者，勞也。）
曹操曰く、士卒が疲勞なり。
李筌曰く、士卒が難用なり。
杜佑曰く、士が疲れ倦むなり。敵人來り、我が利を見て擊進すること能はざるは、疲勞なり。
梅堯臣曰く、人は其れ困乏せば、何くが利に趨らむ？
張預曰く、士卒が疲勞し、戰わしむ可からず。故に雖が利を見ても、將は敢えて進まず。

（鳥集者，虛也；）
李筌曰く、城の上に烏有り。師は其れ遁（のが）るなり。
杜牧曰く、留形を設けて遁る。齊と晉とが相持す。叔向が曰く、「鳥烏の聲は樂し、齊師は其れ遁る」と。後周の齊王の憲が高齊を伐つ。將の班師は、乃ち柏葉を以て幕と為し、糞壤を燒きて去る。高齊は之を視ること二日にして乃ち其の空營を知り、之を追いて及ばず。此れ乃ち留形を設けて遁走せり。
陳皥曰く、此れ言うは、敵人が若し去り、營幕必に空せば、禽鳥は既に畏れること無し、乃ち鳴きて其の上に集まる。楚の子元が鄭を伐つ。將は奔り諜者が告げて曰く、「楚幕に烏有り」と。乃ち止る。則ち其れ是れ留形を設けて遁るを知る。此の篇は、蓋し孫子敵の情偽るを辨ずなり。
杜佑曰く、敵が大いに營壘を作り、我に眾を示す。而して鳥が其の中に集り止るは、虛なり。
梅堯臣曰く、敵人が既に去り、營壘が空虛なら、鳥烏は猜すこと無くして、其の上に來り集る。
張預曰く、凡そ敵が潛に退けば、必ず營幕が存るが、禽鳥が空に見（あらわ）れ、其の上に嗚きて集る。楚が鄭を伐ち、鄭人將に奔る。諜が告げて曰く、「楚幕に烏有り」と。乃ち止る。又、晉が齊を伐ち、叔向が曰く、「城の上に烏有り、齊師は其れ遁れる」と。此れ乃ち留形を設けて遁るなり。

（夜呼者，恐也；）
曹操曰く、士が夜呼けぶは、將が勇ならず。
李筌曰く、士卒が怯えて將に懦す、故に驚き恐れ相呼ぶ。
杜牧曰く、恐懼し安んぜず、故に夜に呼び以て自らを壯すなり。
陳皥曰く、十人の中に一人勇有り。九人が怯懦すと雖も、一人の勇を恃めば、亦、自ら安んず可し。今、軍士夜に呼ぶ、蓋し是れ將が勇無し。曹說は是なり。
孟氏は陳皥が註に同じ。
張預曰く、三軍は將を以て主と為（す）。將に膽勇無くば、眾を安んずこと能わず。故に士卒は恐懼して夜に呼ぶ。晉軍が終夜聲有るがごとき是なり。

（軍擾者，將不重也；）
李筌曰く、將に威重無くば、則ち軍は擾（みだ）れる。
杜牧曰く、言うは、進退舉止（行動）が輕挑率易（軽率）で、威重無くば、軍士は亦擾亂す。
陳皥曰く、將が法令を嚴しくせず、威容が重からずば、士は因りて以て擾亂す。
梅堯臣は陳皥が註に同じ。
張預曰く、軍中に多く驚擾すは、將が持重せず。張遼が長社に屯す。夜に軍中忽亂す。一軍は盡く擾す。遼が左右に動く勿（なか）れと謂う。是れ必ず造變者有り、以て人を動亂せむのみ。乃ち軍士に令して安坐せしむ。遼は中陳に立ち、頃有りて即ち定まる。此れ則ち能く持重す。

（旌旗動者，亂也；）
杜牧曰く、魯の莊公が長勺に齊を敗る。曹劌（そうけい）が請いて之を逐う。公が曰く、「若何（何故か）？」對えて曰く、「其の轍（わだち）が亂れ、旗が靡くを視る、故に之を逐う」と。
杜佑曰く、旌旗が謬動（誤動）し、東に抵し西に觸し（東西で矛盾して動く）、傾倚す（直立しない）は、亂なり。
梅堯臣曰く、旌旗が輒動し（ばらばらに動き）、偃亞が次がざるは（上げ下ろしが揃わない）、紀律無し。
張預曰く、旌旗は眾を齊す所以なり、而して動搖して定ること無くば、是れ部伍（部曲行伍；軍の編成）が雜亂す。

（吏怒者，倦也；）
杜牧曰く、眾が悉に倦弊す、故に吏は畏れずして忿怒す。
陳皥曰く、將が不急の役を興す。故に人人は倦弊す。
賈林曰く、人が困せば則ち多（さわ）に怒る。
梅堯臣曰く、吏士が倦煩せば、怒りて畏れず避（さ）る。
張預曰く、政令が一ならずんば、則ち人の情は倦む。故に吏は多に怒る。晉楚が相攻め、晉の裨將の趙旃（ちょうせん）、魏錡（ぎき）は怒りて晉軍を敗らむと欲（し）、皆命を楚に奉る。郤克（げきこく）が曰く、「二（ふたり）が憾（うら）みて往けば、備えずんば必ず敗れる」と、是なり。

（粟馬肉食，軍無懸缻，不返其舍者，窮寇也。）
一に云く、「殺馬肉食者，軍無糧也；軍無懸缻，不返其舍者，窮寇也。」
李筌曰く、其の馬を殺して肉を食（くら）う。故に曰く、軍に糧無きと。舍に返らざるは、窮迫し竈に及ばざるなり。
杜牧曰く、馬に粟す、言うは、糧穀を以て馬に秣（まぐさ）すなり。肉食すは、牛馬を殺して士を饗すなり。軍に懸けられた缻（炊飯する器）無しとは、悉く之を破り、復（ふたた）び炊さざるを示す。其の舍に返らずとは、晝夜部伍（部隊の隊伍）を結ぶなり。此の如きは皆て是れ窮寇にして、必ず一戰に決さむと欲（す）のみ。「缻」の音は府fǔ、炊器なり。
梅堯臣曰く、給糧以て馬に秣し、畜を殺し以て士に饗し、缻を棄て復び炊さず、舍に返らずと暴露す。是れ決戰して勝を求めむと欲（す）なり。
王晳曰く、馬に粟し肉を食うは、力を為し且つ久しくす所以なり。軍に缻無くば、復び飲食せず。舍に返らずは、回す心無きなり。皆て死を以て決戰すを謂うのみ。敵が此の如きは、當に堅く守りて以て其の弊を待つべし。
張預曰く、糧穀を捐ね以て馬に秣し、牛畜を殺して以て士に饗し、釜を破ること缻に及び、復び炊爨（煮炊き）せず、兵眾を暴露し、復び舍に反らざるは、茲れ窮寇なり。孟明が舟を焚く、楚軍が釜の類を破るは是なり。

（諄諄翕翕，徐與人言者，失眾也；）
曹操曰く、諄諄は語る貌。翕翕は志を失う貌。
李筌曰く、諄諄翕翕は竊かに語る貌。士卒の心は恐れ、上は則ち私語して言う。是れ眾を失うなり。
杜牧曰く、諄諄は、氣に乏しく聲は促（つま）るなり。翕翕は、顛倒失次の（順序が逆になり、つながらない）貌。此の如きは、憂が內に在る。是れ自ら其の眾心を失うなり。
賈林曰く、諄諄は、竊かに議す貌。翕翕は、不安の貌。徐（おもむろ）に人と言うは、遞相（相互）に問う貌。此の如きは、必ず散じて部曲を失うなり。
梅堯臣曰く、諄諄は、誠を懇（ねんごろ）に吐くなり。翕翕は、職事（職務）を曠（おおまか）にすなり。緩やかに言い彊いて安んずは、恐るらくは眾が離るなり。
王晳曰く、諄諄は、語が誠懇の貌。翕翕は、其の上を患らうなり。將は人心を失う。則ち眾は相い與に語り、誠懇にして其の上を患うなり。
何氏曰く、兩人が竊に語るは、主將を誹議する（難を責める）者なり。
張預曰く、諄諄は語なり。翕翕は聚なり。徐は緩なり。言うは士卒が相い聚まり私語し、低く緩にして言い、以て其の上を非とす、是れ眾心を得ざる。

（數賞者，窘也；）
李筌曰く、窘（くるし）まば則ち數（しばしば）賞し以て勸進す（昇進させる）。
杜牧曰く、勢力が窮し窘まば、眾が叛を為すを恐れ、數賞し以て之を悅（よろこ）ばしむ。
孟氏曰く、軍が實（まこと）に窘むなり。士卒が心怠すを恐れ、故に別に小惠を行うなり。
梅堯臣曰く、勢が窮し叛離を憂い、屢（しばしば）賞し以て眾を悅ばしむ。
王晳曰く、眾が窘みて和裕（温和寛宏）せずば、則ち數賞し以て之を悅ばしむ。
張預曰く、勢が窘まば則ち離れ易し、故に屢賞し以て士を撫（な）でる。

（數罰者，困也。）
李筌曰く、困せば則ち數罰し以て士を勵す（奮い立たせる）。
杜牧曰く、人の力は困弊せば、刑罰を畏れず。故に數罰し以て之を懼れしむ。
梅堯臣曰く、人は弊せば命に堪えず、屢罰し以て威を立つ。
王晳曰く、眾は困せば精勤せず、則ち數罰し以て之を脅すなり。
張預曰く、力が困せば則ち用を難（あら）くす、故に頻（たびたび）罰し以て眾を畏れしむ。

（先暴而後畏其眾者，不精之至也；）
曹操曰く、先に敵を輕（あなど）り、後に其の眾に聞かば、則ち心之を惡（にく）む。
李筌曰く、先に輕り後に畏る。是れ勇にして剛無きは、不精の甚しきなり。
杜牧曰く、敵を料（はか）ること不精の甚しき。
賈林曰く、令して能く分明せず、士卒又精練に非ず。此の如き將、先に彊暴欲（し）て人を伐ち、眾が悖（そむ）けば則ち懼れ、懦（意気地が無し）の極（きわみ）に至る。
梅堯臣曰く、先に行うこと嚴暴（嚴酷暴虐）、後に其の眾離れるを畏れ、罰で訓（いましむ）は不精の極なり。
王晳曰く、敵が先に刻暴（えげつなき暴行）を行い、後に其の眾離れるを畏れる。將として不精の甚しきなり。
何氏曰く、寬猛が相濟す（相互に機能す）は、將に精（もはらに）すべき事なり。
張預曰く、先に敵を輕り、後に人を畏る。或に曰く、先に御下に刻暴し、後に眾が己に叛（そむ）くを畏れる。是れ威を用い愛を行うこと、不精の甚しき。故に、上文に「數賞、數罰」を以て言うなり。

（來委謝者，欲休息也。）
李筌曰く、徐（おもむろ）なること前（さき）にして疾（とき）こと後（のち）なるを委謝と曰う。
杜牧曰く、委質し（礼物を捧げ）來謝す所以は、此れ乃ち勢已に窮す、或は他の故（ゆえ）有りて、必ず休息を欲すなり。
賈林曰く、氣委して言謝すは、兩解（双方和解）を欲求す。
杜佑曰く、戰（いくさ）未だ相い伏さず、而下（以下）意氣が相い委謝すは、休息を欲すなり。
梅堯臣曰く、力屈し兵を休ませむと欲（し）、委質し以て來謝す。
王晳曰く、勢は久しかること能わず。
張預曰く、以て親愛委質來謝す所は、是れ勢力の窮すこと極まり、兵を休め戰を息（やす）まむと欲（す）。

（兵怒而相迎，久而不合，又不相去，必謹察之。）
曹操曰く、奇伏（奇襲伏兵）に備うなり。
李筌曰く、是れ軍に必ず奇伏有り、須べからく謹しみて之を察せよ。
杜牧曰く、盛怒して出陳し、久しく刃を交えず、復（また）解きて去らずは、待す所有り。當に謹しみて之を伺察すべし、恐るらく奇伏旁（あちこち）に起ること有り。
孟氏曰く、備有りて別に應ず。
梅堯臣曰く、怒り來りて我に逆らい、久しくして接戰せず、且つ又、解きて去らず。必ず奇伏有りて以て我を待つ。此れ以上、敵情を論ず。
張預曰く、勇怒して來り、既に合戰せず、又引きて退かず。當に密に之を伺うに、必ず奇伏有るなり。

（兵非益多也，）
曹操曰く、權力均し（権位と勢力「権勢と力量」が釣り合う）。
一に云く、「兵は益多くを貴きとするに非ず」。
賈林曰く、眾で寡を擊つを貴きとせず、寡で眾を擊つを貴きとする所。
王晳曰く、晳が謂うに、權力均しくして足る。多くを以て益と為さず。
張預曰く、兵は敵に增多すに非ず、權力均しを謂う。

（惟無武進，）
曹操曰く、未だ便を見ず（習熟していない）。
賈林曰く、武は專（もはら）に進みて足らず、專に進めば則ち暴す。
王晳曰く、但に武に恃る可からず、當に以て智で計り敵を料りて行け。
張預曰く、武は剛なり。未だ能く剛を用いず武以て輕進せば、未だ利を見ずと謂う。

（足以併力、料敵、取人而已。）
曹操曰く、厮養（雑役）足るなり。
李筌曰く、兵眾にして武、力を用うこと均しくば、惟れ人を得る者が勝つ。
杜牧曰く、言うは、我と敵人兵力皆て均しく、惟れ未だ能く武を用いて前進せざるは、蓋し未だ得て其の人を見ず。但に厮養の中に能く其の材を揀擇（選択）し、亦、力を幷せ敵を料りて勝を取るに足るならば、他に求む要なし。
陳皥曰く、言うは、我が兵力は敵に多からず、又、利便無くして進む可きは、必に他國に師を乞うにあらず。但に厮養の中に力を併せて人を取れば、亦、敵を破ること可なり。
賈林曰く、武勇の力無くして輕進すと雖も、智謀を以て敵を料り、力を併せて敵人を取るに足る。
梅堯臣曰く、武は繼なり。兵は不足すと雖も以て繼進せば、以て役を給えて厮養の力を幷せ、敵を量りて勝を取るに足る。
王晳曰く、晳が謂うに、分合の變を善くせば、以て力を併せ敵の間に乘り勝を取る人に足るのみ。故に厮養の輩と雖も可なり。況や精兵をや？曹說は是なり。
張預曰く、兵力既に均しく、又、未だ便を見ず。未だ剛進に足らずと雖も、以て厮養の中に人を取り、以て兵を幷せて力を合せ、敵を察して勝を取るに足る。不に他兵を假らず以て己を助く。故に尉繚子が曰く、「天下、卒を助くに、名づけて十萬と為すも、其の實は數萬に過ぎず。其の兵來りなば、其の將に謂りて、「天下のために先に戰うこと無かれ」と曰わざること無し。此の言が卒を助くに益無きこと、己に兵法有るに如かず。

（夫惟無慮而易敵者，必擒於人。）
杜牧曰く、有深謀遠慮有ること無く、但に一夫の勇を恃みて、輕易にして顧みざるは、必ず敵人に擒にせらる。
陳皥曰く、惟は猶獨なり。此の言は殊に遠慮無くして、但に敵を輕んずは、必ず其れ擒にせらる。獨り其の勇を言わざる。『左傳』に曰く、「蜂（はち）蠆（さそり）にも毒有り、而るに況や國においてをや？」則ち小敵も亦、輕んず可からず。
王晳曰く、唯に能く敵を料らず、但に以て武進せば、則ち必ず敵に擒とさる、明らかに患うは不多に在らず。
張預曰く、能く人を料らず、反りて敵を輕じ以て武進せば、必ず人に擒にさる。齊と晉とが相攻め、齊侯曰く、「吾姑（しばら）く此を滅して朝食せむ」と。馬に介せずして（甲を付けず）馳せ、晉に敗れるとは是なり。

（卒未親附而罰之，則不服；不服，則難用也。）
杜牧曰く、恩信未だ洽（あまね）かずば、刑罰を以て之を齊（ととの）える可からず。
梅堯臣曰く、傅は至なり。德を以て至り、恩を以て親す。恩德未だ敷（し）かずして、罰せば則ち服さず。故に、怨みて使い難し。
王晳曰く、恩信が素より人に浹洽（ゆきわたる）こと非ずんば、心未だ附かず。
張預曰く、驟（急）に將帥の位に居（つ）き、恩信未だ民に加わらずして遽（にわか）に刑法を以て齊えるなら、則ち怒恚（いきどおる心）して用い難し。故に田穰苴（斉の将軍）曰く、「臣は素より卑賤、士卒は未だ附かず、百姓は信ぜず」と。又、伍參（楚の大夫）曰く、「晉の政に從うは新たにして、未だ能く令は行われず」と、是なり。

（卒已親附而罰不行，則不可用也。）
曹操曰く、恩信已に洽き、刑罰無きが若くば、則ち驕惰にして用い難し。
梅堯臣曰く、恩德既に洽き、刑罰行われずんば、則ち驕にして用う可からず。
王晳曰く、所謂「驕子の若き」なり。
張預曰く、恩信素より洽き、士が心已に附き、刑罰が寬緩ならば、則ち驕にして用う可からず。

（故令之以文，齊之以武，）
曹操曰く、文は仁なり。武は法なり。
李筌曰く、文は仁恩。武は威罰。
杜牧曰く、晏子は司馬穰苴の「文能く眾に附し、武能く敵を威す」を舉ぐ。
王晳曰く、吳起云く、「總て文武とは、軍の將。剛柔を兼ねるとは、兵の事なり」と。

（是謂必取。）
杜牧曰く、文武既に行われば、必ずや勝を取る。
梅堯臣曰く、令すに仁恩を以てし、齊すに威刑を以てし、恩威並びて著るしくば、則ち能く必ず勝つ。
張預曰く、文恩以て之を悅ばせ、武威以て之を肅し、畏愛相い兼ねば、故に戰いて必ず勝ち、攻めて必ず取る。或（あるひと）問いて曰く、「『書』に云く、『威が厥（そ）の愛に克たば、允（まこと）に濟（な）る。愛が厥の威に克たば、允に功罔（な）し』と。言うは先ず威なり。孫武は愛を先にす、何ぞや？曰く、『書』の稱す所、仁人の兵也。王者の民に於けるや、恩德素より厚く、人心已に附きてあれば、其れ之を用うに及りて、惟に患うは、寡威なり。（孫）武の陳（の）ぶ所は、戰國の兵なり。霸者の民に於るや、法令素より酷にして、人心は離れ易く、其れ之を用ふに及りて、惟に患うは、少恩なり。

（令素行以教其民，則民服；）
梅堯臣曰く、素は舊なり。威令舊立せば（古くから行われておれば）、教えば乃ち聽きて服す。
張預曰く、將に令素より行われば、其の民已に信ず。教えて之を用いば、人人聽きて服す。

（令不素行以教其民，則民不服。）
王晳曰く、民は素より教わらずんば、卒を用と為すこと難し。
何氏曰く、人が既に訓を失わば、安ぞ得て服を教むや？

（令素行者，與眾相得也。）
杜牧曰く、素は先なり。言うは、將と為り常に無事の時に居りて、須べからく恩信威令が先に人に著きて、然る後に敵に對する時ならば、令が行われ法が立てば、人人は信じて伏す。韓信が曰く、「我は素より得て士大夫を拊循（撫慰）すに非ずして、所謂、市人を驅して戰うなり。之に背水せしむ所以は、其の人をして人自ら戰わしむ」と。其れ素より恩信を受くに非らずを以てせば、威令に從わすなり。
陳皥曰く、「晉の文公が始めて國に入るや、其の民を教うこと二年、之を用いむと欲（す）。子犯が曰く、『民は未だ義を知らず、未だ其の居を安んぜず』」と。此の言は民をして其の生を不苟（おろそかにせしめむ）とすなり。「是に出でて襄王を定む」。此の言は以て君に事（つか）う大義を示す。「入りては務めて民を利し、民は生を懷（やすん）ず。又、將に之を用いむとす。子犯が曰く、『民は未だ信を知らず、未だ其れ用うべからず』と。是に原を伐ちて、以て之に信を示す（三日で終えると原の戦を行ない、落城寸前であったが三日で切り上げ約束を守った）」。此の言は往年在りて原を伐ち、其の利を貪らず、而して其の信を守る。「民の資を（交）易す者、豐を求めず」。此の言は人貪り詐ること無きなり。「明らかに其の辭を徵（しる）す。公の曰く、『可ならむ』と。子犯が曰く『民未だ禮を知らず、未だ其れ恭生ぜず』と。是に大蒐（軍事演習）し、以て之に禮を示す。戰の時に及びて、少長に禮有り。其れ用う可し」。此の五つは、人に教う本なり。夫れ令は先に申要在（繰り返されてこそ）、人に之を聽かせて惑わしめず。法は必ず行われてこそ、人をして之を守らしむ。輕信無きものなり。三たび令し五たび申せば、人に示して惑わず。法令は簡にして當り、議在れば必ず行われる。然る後に以て眾と相い得る可し。
梅堯臣曰く、信服すこと已に久しければ、何んぞ事に從わざる。
王晳曰く、此を知れば、始めて其れ力を幷せて敵に勝つと言う可し。
張預曰く、上が信を以て民を使い、民が信を以て上に服す。是れ上下相い得るなり。尉繚子が曰く、「之に令す法は、小過を更むこと無かれ、小疑を申（の）ぶ無かれ」と。言うは、號令一たび出せば、反易す可からず（変更するな）。自ら大過、大疑に非らずんば、則ち申明を更改須べからずとは、民をして信ぜしむ所以なり。諸葛亮は魏軍と戰うに、寡を以て眾に對す。卒に當に代る者有らば、留めずして之を遣す。曰く、「信を失う可からず」と。是に人人留りて一戰すを願い、遂に大いに魏兵を敗るは是なり。

了、2020年2月22日　更新、2022年7月5日